

子育て期における伝承等物語の活用について

フィリピン、韓国、アフガニスタン出身の移住女性を中心に

大野 順子*

1 はじめに

昔話や民話、伝承等の物語は、子どもたちに対して固有の価値観や考えなど、何らかのメッセージを暗黙裡に伝えるものとして使用されることがある。なぜなら、それらの内容は語り継がれる土地の文化的背景をなしており、それぞれの文化的特徴や文化特有のものが含まれているからである。それゆえ、固有の文化や生活様式等を深く理解するためには、こうした物語等に触れることが最適であると考えられている。

特に、子ども時代のこうした体験や経験はその後の成長に大きな影響をもたらす。子ども時代に両親や周りの大人からその地の昔話や民話、伝承物語を伝え聞くことで、子どもたちは自らが属する独自の文化を理解し、それに順応するような精神的、内面的成長を遂げていくこととなるだろう。また、物語からは子どもたちが生きていく上で必ずぶつかる困難や苦しみからいかにして逃れるのか。そうした障害にぶつかったときにいかにして乗り越えるのかについてのヒントが隠されている。さらに、特に神話などの内容に見られるように、それら語り継がれる物語には子どもたちの道徳的な成熟の達成を手助けし、自己の成長をうながす効果もあるとも言われている (Bettelheim, 1978)。それは子どもたちが成長するにともなって直面するさまざまな心理学的な問題を解決し、人間性——パーソナリティの発達を助け、自らの抱え

ている問題を自らで解決することによって生きることの意味を見出すことで自分の力に自信を持つことが物語を通じて可能になるということなのである。

このようにして見ると、昔話や民話、伝承物語には子どもの成長にとって役立つ教育的効果が多分に含まれていることがわかる。例えば、文部科学省が告示している小学校学習指導要領解説「国語編」(2017年7月) 第一章「総説」の学習内容の改善・充実の我が国の言語文化に関する指導の改善・充実の部分において「伝統文化を学習することを重視」することを通じて、固有の文化の担い手としての意識を醸成することが期待されている。そのために教材として昔話や伝承物語などの使用が推奨されている。

このような固有の文化の伝達については、日本に住む移民移住者⁽¹⁾にとっても同じである。かれらは母国から離れた日本社会で、自らのルーツであるそれぞれの出身国の文化や言語、生活様式、宗教や考え方を次の世代へ継承していこうと努力している。特に、かれらの間に生まれた‘日本生まれの外国にルーツのある子どもたち’にとって、自らのルーツを継承することは重要で、自身のアイデンティティは両親の出身国に属するのか、あるいは生まれた日本に属するのか「どっちつかず」の、「どちらでもない」し、また「どちらでもある」とされる「変則的存在(アノマリー: anomaly)」(Eriksen, 2006)となるのである。

* 摂南大学特任准教授

そこで、本稿では移民移住者の親が、その子どもたちにどのように民族意識を伝達しているのかについて、その方法としてそれぞれの出身国に古くから伝わる昔話や民話、伝承物語の活用状況について出身国での子育ての様子、さらに移住先での様子について明らかにしていきたい。移民移住者の家庭において、日本では子どもたちへの民族的アイデンティティの継承に関しては、独自の文化的行事への参加や言語教育活動等を通して継承されている実態は見られるが、物語を活用している実態を明らかにした研究というものは筆者の知る限り現在に至るまでほとんど見たことがない。日本人家庭では子育てにおいて昔話や伝承などの読み聞かせについては多くの家庭で実践されており、それらを読み聞かせることはめずらしくない。よって移民移住者の子育てにおいても民族的アイデンティティ醸成のためにそれらを活用しているのかどうかについて検証してみる価値はあるだろう。次節ではその検証の前に、まず多文化化、多民族化する日本社会の現状についてふれておきたい。

2 多民族化する日本社会

出入国管理庁プレスリリースによると、令和2年末現在における日本の在留外国人総数は2,887,116人となっている⁽²⁾。前年比で約5万人(1.6%)の減少である。その内訳は中長期滞在者数が2,582,686人、特別永住者数は304,430人となっている。国籍・地域別にみると、中国が一番多く、次いでベトナム、韓国、フィリピン、ブラジルと続いている。かつては特別永住者として日本に居住する韓国・朝鮮籍の外国人数が一番多かったが、国際結婚その他による日本国籍取得により、現在その数は減少傾向にある。

さて、日本は建前上、欧米諸国のように積極的に外国人受け入れを行っている国家ではな

い。しかしながら、実際には1970年代以降より、在日韓国・朝鮮人をオールドカマーと呼ぶのに対してニューカマー(新渡日外国人)と呼ばれる外国人を就労目的のため受け入れている実態がある。日本はかれらを主に製造業における労働力不足解消のために、周辺のアジア諸国より低賃金労働者として男性を中心に受け入れてきた。その後、1980年代には人道的支援という立場からインドシナ難民を受け入れたことにより、外国人住民の権利や生活保障を整備し、日本人と平等に扱う必要性が生じるようになった。そして、1989年の出入国管理法の改正にともない、主に中南米から日本とつながりのある日系人を中心とした外国人を受け入れることとなった。かれらも日本経済を支える労働力として移住してきた。

その後も家族の呼び寄せや日本で子どもが生まれたことによる定住化が進むなど、在留外国人数は現在も増加の一途を辿っている。また最近では日本社会の少子高齢化のあおりをうけ、新たなタイプの外国人受け入れが始まっている。例えば、医療福祉現場での看護職や介護職に就く外国人の受け入れである。さらには、日本の技能や技術の継承やその開発途上地域への移転を目的とした人材——研修生や技能実習生の受け入れ制度も始まっている。しかし、一方でこうした制度や取り組みは安易に外国人を安価な労働力として搾取しているという実態も見過ごせない。国境を越えた移動がめずらしくもない時代において、日本も多くの外国人が隣人として生活するようになってきている。それにもかかわらず、いまだ日本社会は人びとの意識も社会構造や制度も移民、移住者のような外国籍住民にとっては厳しいままである。残念ながら成熟した多文化共生社会といえるには程遠い。

このように多文化、多民族化がすすむ日本社会において近年、直面する課題として浮上して

いるのがかれらの「子ども」の問題である。つまり、移民移住者の親をもつ子どもたちの存在である。2020年3月に発表された文部科学省の調査によると、2019年時点における住民基本台帳に記載のある学齢期（小学校、中学校）に相当するこうした外国にルーツのある子どもの人数は123,830人となっている。そして、こうしたニューカマー世代の子どもたちの増加にともない「不就学」という深刻な問題があるとの指摘が以前からあった(宮島, 2003)。不就学とは、義務教育年齢にありながら学校に通っていないことを言う。つい最近では、令和4年3月25日の文部科学省報道発表によると不就学の可能性がある子どもが約1万人いるとの公表があった。不就学になる理由はさまざまあるとされるが、そのひとつに自らの民族的出自に対する日本人からのいじめやからかいがあると言われている。子どもたちにとって民族的アイデンティティやルーツは自分が一体何者であるのかを確認するための軸となるものである。それらを否定されるということは、自らの存在を否定されていることと変わらない。かれらにとってルーツを知り、自らのアイデンティティに自信を持つということは何よりも優先されるべきものであり、それぞれの出身国において語り継がれる民話や伝承物語等に触れることが、彼らの自己肯定感の向上につながるものになることが期待できはしないだろうか。

3 子育て期における昔話や民話、伝承物語等の活用

さて、子どもが幼いころ、親が絵本などを子どもに読み聞かせるという行為は子育てにおいて何らめずらしいことではない。家庭内において、昼間子どもと過ごす時間や就寝前に、主に母親から子どもたちは絵本などを読んでもらい、その話の内容に魅了され、引き込まれる経

験をしたことがある人は少なくないはずである。家庭外においても、地域の図書館や子育てサークルなどでは、例えば、「おはなしの会」のような名称で子どもたちへの絵本の読み聞かせが積極的に行われていることも多い。それでは、子育て期においてこうした物語の読み聞かせが取り入れられるようになってきているのはなぜか。その理由は大きく三つあると考えられている。

まず一点目は、本の読み聞かせを含めた子ども時代の読書経験が、子どもたちの自己肯定感や意欲、そして自尊感情を高めることに効果的であるという理由からである。国立青少年教育振興機構が2012年（平成24年）3月に実施した「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究」によると、子どもの頃に読書活動が多い人ほど、「未来志向」「社会性」「自己肯定感」「意欲・関心」「文化的作法・教養」「市民性」において、現在もそれらに関する意識や能力が高くなるという調査結果が出ている。なかでも、就学前の段階で家族から昔話を聞いたこと、本や絵本の読み聞かせをしてもらったことなどの読書活動を経験した人はこれらの能力や意識が高い傾向にあることが明らかとなっている。自己肯定感の醸成等、子どもたちの内面的成長は、子どもたち自身がその成長（変化）に気づくことはなかなか難しい。しかしながら民話や伝承物語には、そういった子どもたちの内的変化を手助けするような内容が含まれており、それらを読書活動によって可能にしているのである。

次に、本の読み聞かせという行為が、非常に教育的に価値があるものとされていることが子育て期においてしばしば取り入れられている二点目の理由である。民話や伝承物語は公教育制度の整っていない時代においては、民衆によって語り継がれてきた歴史があった。それは次の世代に語り伝えたい魅力や教育的価値が秘めら

れているからだと言われている（篠原，2017）。そして、物語の伝達は、知的な学習効果のほかにも、子どもたちの心の安定や、生きることへの前向きな姿勢の形成など多くの効果を内包している。とりわけ、伝承物語の読み聞かせの効果には以下の五点が挙げられている。

- ①安心感
- ②言語の獲得及び論理的思考力の向上
- ③自我の確立を助ける
- ④幼児理解
- ⑤人生の知恵や教訓を学ぶ

（篠原，2017）

さらに、特に神話などには多く見られるが、昔話や民話、伝承物語にはそこに登場する主人公たちが子どもたちに社会のルールを理解させ、道徳観などの理性（超自我）を発達させる（Bettelheim, 1978）。こうした点からも、物語の読み聞かせは子どもたちにとって非常に教育的価値が高いものとして認識されているのである。

さいごの三点目は、こうした物語には自己形成につながるアイデンティティの確立にかかわる要素が内在されていることがあるということである。この点については、本稿で取り上げる外国にルーツをもつ子どもたちの成長にとっては重要なポイントであろう。とりわけ、これら物語は子どもたちが自分自身は一体何者であり、何をすべきか、ということを見出させ、子どもたち自身の将来的な人格の発展を手助けする。そして、いかなる困難に直面してもひるまず立ち向かっていき、幸せな生活を勝ち取ることができることを教える。こうした教訓が子どもたちの真のアイデンティティを獲得することにつながっているというのだ。移住先の社会において、かれらの多くは自らを常々社会の周縁におかれた存在として認識し、葛藤し続けているこ

とだろう。しかし、苦悶の先にはかならず幸運が待ち受けているという教えは、かれらに生きる力を与えることになろう。このように昔話や民話、伝承物語等は、自己を成長させることを象徴的に示し、かれらが物語の主人公と同一視することで民族的な無意識の力を身につけて内的に生まれ変わることを手助けするのである（Bettelheim, 1978）。移民移住者を積極的に受け入れている国では、この効果に注目し、独自の取り組みを実践しているところも存在している。一例をあげると、スウェーデンでは社会の中で疎外感をもつことが多い移民や難民に対して、公共の図書館等がマイノリティ住民へのサービスのひとつとして母語資料の提供や同じ文化的背景を持つ移民同士が集まる場所を提供するなどの支援を行っている。そうしたサービスの一部として、移民移住者の子どもたちに対して母語での読み聞かせなどを行い、それら一連の取り組みが移民の子どもたちの精神的拠り所となるようなサービスを展開している（小林ソーデルマン他編，2012）。移民移住者の子どもたちと昔話や民話等の物語の読み聞かせについては次節にて詳しく述べていくこととするが、かれらにとってはこれら物語に触れることが、個々のルーツに基づくアイデンティティ形成に欠くことができないものであることは疑う余地のないことだろう。

4 移民移住者の子育てと伝承等物語の読み聞かせ

現在、日本における移民移住者のあいだでは、すでに二世、三世世代が中心となりつつある。かれらは日本で生まれ育ち、学校へ行き、就職し、結婚し、子どもが生まれ家庭を築くといったように、ごく一般的な日本人と変わらない生活を送っている。外国人受け入れが本格的に始まった1970年代～1980年代当時、かれらの

多くは労働環境や就労に関する問題を抱えていた。しかしながら、次第に日本社会での定住化が進む中で、かれらが抱える問題も家族(家庭)の問題、結婚、離婚、子ども、教育など多岐に渡るようになった。最近では老後の問題、介護の問題、遺産相続の問題などより生活に密着した問題に直面するようになってきている。そうした中で最も関心のある問題として位置づいているのが「子育て」である。

かれらにとって日本で出産を経験し、育児をしていくことは並大抵のことではない。出産育児に関する制度やサービス、育児方法などすべてにおいて言葉の理解が不十分な中、自ら率先して情報にアクセスしなければならない。特に、子育てに関する内容は女性(母親)がそのほとんどの責任を負っていることは移民移住者の家庭においても同じである。多くの移民移住女性たちは結婚して家庭を持つ以前は親への経済支援や母国の親類家族への仕送りをするため仕事をしていた。ところが、結婚を機に、子どもが生まれると家事育児のすべてを一人で担うことになる。移民移住女性に限ることではないが、既婚女性は未婚女性よりも家事育児のような家庭内労働の不平等な区分に直面し、健康と心の問題に直面しやすく、男性に比べると結婚によって受ける利益は少ないとも言われている(Brake, 2019)。そして、家族という共同体的な考えの中で従属、献身させられ、自らの利益より家族全体の善を優先することを覚え、それをもって自己実現とすることを多くの女性は学んでいく。日本という異国で、移民移住女性たちの多くは配偶者の協力を十分に得ることなく、自らを犠牲にし、孤立した状態で子育てを行っているのが現状なのである。

既に述べているように、実際の子育てにおいては、子どもたちのルーツである親の出身国の文化やことばの継承が重要になってくる。それらを子どもたちに伝え、学ばせることで日本と

いう異国においてもかれらの民族的アイデンティティを強く意識させている。その主な方法には母語学習教室やそれぞれのエスニックコミュニティ内において開催されている伝統文化・芸能行事への参加などがあげられる。そして、その他の方法として本稿で注目しているのが子育て期における民族意識醸成のための本(民話、伝承物語、昔話など)の活用、読み聞かせである。もちろん、読み聞かせに使用される本はこうした種類のものに限られるものではない。子どもたちの興味がわくもの、読みやすく理解しやすいものが選ばれることが多いのも事実である。昔話や民話、伝承物語以上に子どもたちが好む本は数多く出版されている。しかしながら、前節でも述べた通り、これら物語には、自我の確立や人生の知恵や教訓を学ぶことができるという効果がある。それはつまり、子どもたちにとってこうした物語を通して母文化を理解し、母国の民族的アイデンティティを構築することが可能であるということである(松山、2020)。

この読み聞かせは一般的には家庭内で親(母親)から子どもへとなされることが多いが、家庭外においても実践されている。その一例として図書館での取り組みがある。図書館にはさまざまな言語の本が所蔵されているところも少なくない。図書館には住民の「知る自由」に応えるために、特に、移民移住者のような社会的マイノリティの人たちも図書館にアクセスすることができるよう、「多文化サービス」を行わなければならないことになっている⁽³⁾。その内容は「民族的・言語的・文化的少数者(マイノリティ)を主たる対象とする図書館サービスで(中略)、日本で暮らすマイノリティの知る自由・読む権利・学ぶ権利・情報へのアクセス権を、母語を中心とした資料・情報の提供によって保障」するものである(加藤、2019)。例えば、外国人居住者が多い新宿区立大久保図書館では

この「多文化サービス」を活かして、外国住民に母語にふれる機会を提供する目的で外国語の読み聞かせを行ったりしている(米田, 2018)⁽⁴⁾。

それでは、次節において実際に日本に住む移民移住者家庭での子育て期におけるこうした物語の活用についてみていくこととしたい。それぞれの出身国における子育ての実態を含めて、日本での子育ての様子について迫ってみたい。

5 フィリピン・韓国・アフガニスタン の事例より

ここでは、まず、移民移住者家庭の子育てにおいて、昔話や民話、伝承物語等の読み聞かせの実情の一端を見ていきたい。日本人家庭の子育てで読み聞かせを行っている様子については幼児教育や保育関連の領域においてその価値や実践についてはいくらかの研究調査の蓄積が見られる(久保木, 2017など)。しかしながら、移民移住者の子育てにおいて関連した先行研究は筆者の知る限りほとんど見られない。それはおそらく、「子育て」という非常にプライベートな問題に加えて、移民移住者の子育てという、これまであまり関心が寄せられることもないがゆえ、その実態が明らかにされてこなかったことによるものであると考える。本稿ではその実態に迫るため、現在日本に住み、出身国や日本で子育てを経験したフィリピン出身女性、韓国出身女性、そしてアフガニスタン出身女性の三

名に子育てに関してのインタビューを行った⁽⁵⁾。三名とは筆者が10年以上前から関わり続けている移民移住者及び難民支援団体で知り合い、現在も交流を続けている。三名とも日本で出産・子育て経験があり、そのうち二名は現在も子育て中である。三名とも前述したニューカマーとして渡日したという点から本研究の課題を明らかにするためには最適と考えた。また、それぞれ三名とも出身国については文化的・宗教的な部分においてはそれぞれ異なっており、それぞれの地域について比較検討可能な点もインタビュー者として選んだ理由である。

インタビューではいくつかの質問項目——例えば、出身国での子育ての状況、日本での子育て経験について、昔話や民話、伝承物語の読み聞かせを行ったことがあるか等を中心として自由に意見を語ってもらうといった半構造化インタビュー法を採用した。この手法を用いた理由は個々の子育ての実相を知るためには直接当事者からの声を聞く必要があるということ。そして、何よりもこの手法によって、現実的な子育ての様子が明らかになると考えたからである。ただし、こうした個別の意見に重点を置く方法は、単に個人的な意見や経験にとどまり、それが移民移住者の子育て全容を語るものではないという批判もあろう。しかし、個別的な語りの中にこそ普遍的に共有せざるを得ないような個別を通して見出される普遍(盛山他編, 2005)があるとするならば、移民移住女性個々の語り

【表1】

事例番号	1	2	3
氏名(仮名)	レベッカさん	ヒョンジュさん	サンディさん
出身国	フィリピン	韓国	アフガニスタン
日本在住年数 (2021年8月現在)	31年	21年	18年
職業	無職(専業主婦)	介護職	工場勤務
家族構成	本人	本人、娘	本人、夫、息子、娘
インタビュー実施日	2021年7月16日	2021年7月21日	2021年7月30日

(被調査者のプロフィール/筆者作成)

からその実態の一端を導き出すことも可能であると考える。

【表1】は、本研究に関してインタビューにご協力頂いた被調査者三名のプロフィールの概略である。インタビューの時間はそれぞれ一時間から二時間程度であった。

前述の通り筆者は2010年から民間の移民移住者支援団体で週一回ボランティアとして関わりながら、移民移住者の問題について研究をしている。この三人とはその民間団体を通じて知り合った。三人にはあらかじめ研究内容について説明をし、インタビューの内容を本稿に使用させていただくが、決して個人が特定されないよう最大限配慮することを伝え、本研究に協力して頂いた。インタビューは支援団体本部やそれぞれの居住地近隣の商業施設等のカフェスペースで行った。インタビューの会話内容はすべて録音し、テープ起こしをしながら絵本や伝承物語などを読み聞かせする部分を中心に記録しまとめた。

レベッカさんは三人の中で最も日本在住歴が長い。渡日当初はサービス業に就いていたが、そこで日本人男性と知り合い再婚し子どもが生まれた。最初の子どもはフィリピンで出産し、出身国と日本の両国において子育ての経験がある。再婚後は、英語講師などの仕事をしていたが現在は定年退職し、子どもたちも独立し、定期的に行き来しながら安定した生活を送っている。ヒョンジュさんは留学生として来日した後、日本で結婚し娘を出産した。その後離婚し、親子二人で暮らしながら現在は訪問介護の仕事をしている。サンディさんは2000年初頭に夫と共に渡日した。日本で子どもを出産し、家事育児に従事していたが、現在は子育ても一段落し、パートとして働いている。

それでは、以降、それぞれ移民移住女性たちの子育てにおける物語の読み聞かせについてその実態を概観していきたい。カッコ（「 」）内

は被調査者三名それぞれの語りとなっている。

5.1 レベッカさんの場合

まず、フィリピンの子育て一般について説明していきたい。カトリック信者が多いフィリピンでは、子どもが生まれると第一に洗礼式を行う。家族親類など一族が教会に集い、洗礼式で子どもの誕生を全員で祝福することが一般的である。その後、各家庭で子育てがはじまるが、子育ての担当は主に母親となる。ただし、フィリピンでは母親も含めて家族全員が家計を支えるために仕事をしていることが多いため、主たる子育ては母親が担いつつも、母のみで子育てをすることは無いということだ。レベッカさんがフィリピンで子育てをしていた時期は母親の役割を母に代わって‘ヘルパー（ベビーシッターのこと）’が担っていたことが多かったそうである。フィリピンではこのヘルパーという仕事に従事している人たちが主に母親に代わって子育てをする仕組みとなっている。ヘルパーを担うひとはほとんどが女性で、年齢も10代後半（16歳～17歳）と比較的年齢が若い。彼女たちはさまざまな事情により十分な教育を受けることができず、乳幼児をケアするヘルパーとなり、他人の家の子どもを世話する仕事に就く。フィリピンではこのように、主に子育ては外部の資源を使うことが一般的であるようだ。また、フィリピンではこのヘルパーに支払われるお給料も年間一万円程度と安価であるということもヘルパー利用を促している要因かもしれない。

母親が子育てをするのは、夜仕事が終わって帰宅してからのことが多い。特に、子どもと一緒に就寝することは母親の一日の大きな役割となっている。昔話や民話、伝承物語等の読み聞かせについては「あまりやらない」ということである。実際に、フィリピンではこうした物語の読み聞かせはあまり一般的ではないということ

である。なぜなら、これら物語の内容には教訓的な内容のものが多く、子どもへの読み聞かせにおいて、そういった種類の本を選択することはあまりないそうである。それよりも、例えば、ディズニー作品のようにどちらかといえばエンターテインメント性の高いカジュアルなものを選ぶ傾向にある。具体的には、‘シンデレラ’や‘白雪姫’、‘三匹の子ぶた’、‘ジャックと豆の木’などの話は非常に好まれているようである。また、カトリック信者が多いという背景から「(子どもが)小さいときは聖書の話をする」ということだった。聖書に挿入されている話などを子どもたちに読み聞かせることもあるそうだ。

しかしながら、こうした中、フィリピンで最も子どもたちに読み聞かされ、語り継がれている話がある。それが、フィリピンの国民的英雄、Jose Rizal (ホセ リザル/ホセ リサル)に関する話である。ホセ・リサルとは1890年～1919年の帝国主義、植民地支配の時代にフィリピン独立運動の指導者として知られている人物である。フィリピンは当時スペインの植民地支配下にあったが、フィリピンの未来はフィリピン人自身が作っていくべきであるとフィリピン社会に改革の必要性を訴えた人物として今日のフィリピンでは民族的英雄の一人として称えられている(羽田監修, 2021)。彼についての逸話は家庭でも親から子へ語られ、学校では教材となり語り継がれている⁽⁶⁾。ただ、移住先の日本では家族(日本と母国両方の家族)を支えるため日常的に多忙を極め「子どもと過ごす時間がない」ため、なかなか読み聞かせをしたくてもできない現状であるそうだ。

5.2 ヒョンジュさんの場合

韓国の子育ては、基本的な部分は日本と大きな違いはなく、母親が中心となり子どもを育てることが一般的である。近年、韓国においても結婚後、祖父母世代との別居がソウルなどの都

市部においても、地方においても趨勢となり、母親がひとりで子育てを担っていることが多くなっている。その結果、日本でも頻繁にニュースになる孤立した子育てによって起こる児童虐待などが社会問題化しているようだ。また、最近では、特に富裕層において、出産後、家(実家)や家族とは別の、子どもを育てることに特化した専門施設に出産後一ヶ月程度入所し、そこでゆっくりと安心して母親もストレスをためることなく子育てをする方法も人気があるそうだ。

さて、韓国では子育てにおける乳幼児期の子どもたちへの昔話や民話、伝承物語等の読み聞かせについては多くの家庭で普段から行われている。そのため‘絵本セット’というかたちで、出産祝いなどで読み聞かせのための本一式が贈呈されることがよくあるそうだ。ヒョンジュさんも「(出産祝いで)絵本セットを買うことがある」ということだ。セットになっている本の内容には、礼儀の話、生活の仕方について、友だちとの付き合い方など、子どもたちが成長する上で重要な事柄の内容について書かれたものが多いということである。ここからはこうした韓国の民話等物語のもつ教訓的な内容を用いて子どもたちを一人前の大人に育てようとする一端を垣間見ることができるだろう。こうして韓国では読み聞かせは「(子どもが)大人になるためには大事」なことで「本と友だちになる」ように子育てを行っているということだ。

なかでも‘虎’に関する話は有名である。韓国では虎はさまざまな悪事や悪者から身を守ってくれる身近な存在の動物として、その勇ましい姿から威厳や勇敢の象徴として神聖化されている。韓国建国の物語として有名な話にも虎があらわれる内容の物語がある。その中で、比較的よく子どもたちに読み聞かせる話(伝承童話)として‘おひさまとお月さま(해님 달님)’という話がある。少し長くなるが、韓国の子育て

において子どもたちに読み聞かせる際の教訓的な部分を多く含んでいるという点を実際に理解して頂くために、その内容の一部を以下で紹介する⁽⁷⁾。

昔々、深い山奥に、母と兄妹が仲睦まじく暮らしていました。

貧しい暮らしだったため、母親は毎日、山のふもとの村まで働きに出かけていました。

母は兄妹に「知らない人が来たらぜったいにドアを開けてはいけませんよ」と二人に言い聞かせていました。

ある日、一日中働いた母は餅をもらって家に帰りました。

その帰り道、山の峠をひとつ超えたところで、大きな虎があらわれました。

虎は「フンフン、香ばしい餅のにおいがするね。餅をひとつくれたら食べないよ。」

母は怖さでぶるぶると震えながら、ふかふかの餅をひとつ虎にわたしました。

虎は餅をもらい、食べてしまいました。

母が二番目の峠をびくびくしながら超えているとき、また虎があらわれました。

虎は「お餅をひとつくれたら食べないよ」といいました。

母はもちもちした餅をまたひとつ虎にあげました。

虎は母が峠を越えるたびにあらわれ、そのたびに母は虎に餅をあげました。

そして、とうとうお餅は最後のひとつになってしまいました。

母は「最後の峠がひとつ残っているけど、お餅がなくなったらどうしよう」と心配で体がぶるぶると震えました。

最後の峠を越えようとしたときでした。

また虎が出てきて「お餅をひとつくれたら食べないよ」といいました。

母は「虎さん、もうわたしお餅がありません。

どうか助けてください」といいました。

虎は「なに、もう餅がないならお前を捕まえて食べるしかない。」といい、「ガオーン」といって、あっという間に母を飲み込んでしまいました。

そして母の服に着替えて、兄弟が待っている家に行きました。

(中略)

そうすると虎は斧を使ってぐんぐんと登ってきました。

何もできない兄弟はとうとう捕まってしまう、ぶるぶると震えました。

兄は天に向かって「大きな縄で助けてください」と祈りました。

妹も涙を流して祈りました。

そのとき、天から太い縄がするすると下りてきました。

兄妹は縄をつかんで空高く登っていきました。

その様子を見た虎も「大きな縄を下してください」と祈りました。

すると不思議なことに縄が下りてきました。

虎は素早く縄をつかみました

ところが、縄はぷつんと切れてしまいました。

実は虎がつかんだのは腐った縄でした。

虎はキジ畑に落ちて死んでしまいました。

そのとき虎の血でキジ畑が真っ赤に染まりました。

天に登った兄弟は、神様から兄は太陽になり妹は月になるように言われ世の中を照らすようになったということです。

恐れる存在である虎に対して、母との約束をしっかりと守った兄妹は協力して虎を退治し、危機一髪、神様に助けられ、さいごは神様の言う通り、それぞれ太陽と月になって世の中の役に立つようになったという話である。韓国ではこ

うして、伝承される物語などを用いて子どもたちに読み聞かせることで、人としての振る舞いや徳のある行動を教える。もちろん、フィリピンのように‘シンデレラ’などのディズニー系の本を読み聞かせることもあるそうだが、それだけに偏らず、礼儀や作法などをしっかりと説いた話も同時に読み聞かせている。このように韓国では民話や昔話、伝承物語など本を読み聞かせることは子どもたちにとって大人になるために必要であり、そうした内容の本に親しむことが子どもの成長にとっては重要であると考えられているようである。

5.3 サンディさんの場合

アフガニスタンでは子育ては女性（母親）の仕事である。また子育て以外にも母親が家族全員の世話をすることが慣習となっている。女性は嫁いだ先で自分の子どもを含め夫の家族全員の世話（食事の準備、掃除、洗濯などの家事）全般を担当する。祖父母による協力もない。イスラム教では女性の地位は男性と比較すると極めて低く、普段から抑圧されている状況である。よくイスラム教内では‘女性を守るためにそのようになっている’というように、抑圧された女性を肯定する考えや意見があるがそれは男性からの一方的な意見であり、女性側からすると決して守られているとは言えない。何をすることも夫（男性）の許可が必要な社会なのである。ただ、唯一子育てにおいては男性が子どもたちをお風呂に入れるなどの簡単な育児協力はあるようだ。

子育てにおいて昔話や民話など物語の読み聞かせについては「(母による)読み聞かせはない」ということで、ほとんど実践されていないようである。なぜなら、女性は幼少期から学校へ行くことが家族から認められていないことが多く、女性のほとんどが文字を読めず「(絵本を)読めないから」ということだそう。母親が子

どもに本を読んであげるといことができないのだ。その代わりに「父親が夜寝る前に(読み聞かせ)することがある」ということである。男性（夫、家長）が夜、眠る前に子どもたちを集めて物語を読んであげることがよくあるようだ。話の内容は創作話や童話、イスラムの預言者の話など多岐にわたっている。創作話では‘ヤギと子どもたち’という話が有名で、子どもたちを食ったオオカミが歯医者に行き、歯をつくらせてもらうのだが、歯医者は炭でわざと脆い歯をつくり、以降、ヤギを食べようとしたところ、ヤギの角が堅く歯が折れて子どもたちも助かる…といった内容の話である。その他、ピノキオなどの世界的に語り継がれている話などもよく子ども達へ読み聞かせているようだ。

そうした中、預言者ヨセフ（Prophet Joseph = 預言者ヨセフ / Yusuf = ユスフともいう）の話が非常に読み聞かせに人気があるということである。イスラム教における預言者とは、神（アッラー、またはアッラーフ）によって選ばれ、神からの声を授かったとされる人たちのことをいう。ユスフもイスラム教の聖典コーランに登場する預言者の一人である。ユスフはアフガニスタンではヒーロー的な存在として慕われ、子どもたちにも彼の偉業が物語などを通して語り継がれているということである⁽⁸⁾。それは、ユスフの行動を通して、いかなる困難にも耐え、乗り越える強さを教え、乗り越えることで大きく成長することを子どもたちに伝えているということである。

そもそも、アフガニスタンでは子育てに関しては、非常に厳しい子育てが実践されていることが多い。それは子どもたちのなかから‘俗念’を捨てさせることが子育ての目的とされていることにもよる。そして、子育てにおいて親——特に‘大人の男性’を敬うことを教え込まれる。こうした子育ての目的を達成するために、一般的な物語以上に教訓的内容を多く含むとされる

昔話や民話、伝承等物語を活用している場合も少なくないということである。

6 事例の分析、及び考察

以上、三名の移民移住女性の語りからフィリピン、韓国、アフガニスタンの子育て期における物語を活用についてその実態の一端をみてきた。日本と同様にこれら3ヶ国においても子育ての一環としてこうした物語の活用が行われている実態が一部明らかになった。その目的の中には、物語を読み聞かせることがそれぞれの国における考え方や価値観、文化を伝達する手段として使われていることもうかがえた。一方、移住先の日本においてはその利用はあまり活発ではない。レベッカさんは「(昔話や民話、伝承物語等の)情報が無い」ため子どもたちに読み聞かせをしたくてもできない現状があるという。もちろん、全く情報が無いというわけではないが、入手するのは相当困難であると推測する。例えば、ヒョンジュさんはわざわざ韓国で出版されている本を子どもに読み聞かせるために数冊家族や知人より送ってもらったと言っていた。

また、彼女たち三人に共通していることであるが、日本では日々の仕事で多忙なため子どもたちと過ごす時間が十分にもてないことから読み聞かせをしたくてもできない現状もあるということが見てきた。そうした中でヒョンジュさんは母国の家族から絵本を送ってもらい、できるだけ子どもに読み聞かせることを心掛けたようだ。つまり、移住先の子育てにおいては、親の考えや価値観、本へのアクセスの可否がそれぞれの民族的アイデンティティの醸成に少なからず影響する可能性があることがわかる。

さらに、昔話や民話、伝承物語等は子どもたちにとって説教じみでいて、現状では読み聞かせにあまり好まれて選択されていないという実

態も明らかとなった。三人の中でも、特に、レベッカさんは子どもへの読み聞かせには教訓的な内容を多く含むこうした物語を使用することは稀であると述べている。他の二人についてもレベッカさんほどではないが、子どもたちが好む傾向のある読み物、つまり、エンターテインメント性のある話を子育て期の読み聞かせに採用する傾向が多くなっていると述べている。実際に読み聞かせを受ける子どもたち自身からの要求も関係していると予測できるが、それぞれの地域に根付いている昔話や民話、伝承物語よりも、広く認知されている話を使用する頻度が増えているという現状なのである。それが‘シンデレラ’や‘白雪姫’、‘三匹の子ぶた’、‘ジャックと豆の木’などの話の使用であった。‘シンデレラ’は意地悪な継母や姉妹から受ける理不尽な扱いに耐え、最終的にはかれらを見返し王様のお妃になるという話である。‘三匹の子ぶた’はものごとに対していい加減な気持ちで取り組むと痛い目に遭うため、しっかりと計画を立てることが大切であることを子どもたちに教える。‘ジャックと豆の木’は自己主張をすることの大切さや、それとともに、自らすすんで危険を冒しながらも人生の苦難を乗り越えていくことの重要性をメッセージとして子どもたちに伝えている。いずれも子どもたちが成長する上で欠かせない内容となっている。これら話の内容においても教訓的な部分があることは確かであるが、エンターテインメント性もあり、それゆえ読み聞かせに選ばれる頻度も高くなると考えられる。だが一方で、上述したようにフィリピンでは英雄のホセ・リサールの話、韓国では虎の物語、アフガニスタンでは予言者ユスフの話など、独自の文化や価値観を伝える物語も同時に子育て期においては活用され続けている。

ただし、子育て期においては、昔話や民話、伝承物語に特化することなく子どもたちに読み聞かせる本は多様であっていいだろう。もしこ

うした話や物語が今後、積極的に子どもたちへの読み聞かせに選ばれるとするならば、読み聞かせを実践する親や子のニーズに対応するようなかたちで多少の読みやすくなる変化や変容を伴うことが求められるだろう。そうすることでこれら話や物語も選ばれ、それぞれの文化やアイデンティティ醸成のために長く継承されていくのではないだろうか⁽⁹⁾。

7 おわりに

本稿では移民移住者の子育てにおける昔話や民話、伝承物語等の読み聞かせの実態とその意味について検証した。なかでもこれら物語が移住先でそれぞれの出身国の固有の文化継承に寄与しているのかについても概観した。さまざまな教訓やメッセージ性を含む物語の活用は、子どもが成長する過程で意味のあるものとなる。同時に、移民移住者の子どもたちにとってはそれに加えて民族的アイデンティティの形成やルーツに対する自尊感情の向上に一定の効果も期待できそうである。

しかしながら、実際に読み聞かせでこうしたリソースを使用するかしないかは各家庭の状況、親の考えや価値観による部分が多い。特に、移住先の日本では母国の出版物にアクセスすることは容易なことではない。最近ではそうした困難を克服するため、インターネット等を利用し、オンラインで‘読み聞かせる’といった手段を取る移民移住者家庭も増加しているようだ。ただ、こうした手段を各家庭、個々に任せるのではなく、例えば、社会教育施設の一つである公共図書館のような施設において各国の伝承物語や絵本などの多言語資料を充実させ、移民移住者の利用を増やすなどの行政サービスを充実させることも可能ではないだろうか。そうすることでこれらの利活用もより増えていくことであろう。

さいごに、今回の内容をもとにして、こうした物語の子どもたちへの読み聞かせの効果について詳細な調査を展開していくことも重要である。さらに、実際に読み聞かせを受けた子どもたちを対象に読み聞かせの効果について検証することも必要になろう。これらの点については今後の課題としたい。

引用文献

- Bettelheim, B. (1978). 昔話の魔力 波多野完治・乾侑美子共訳 評論社 〈注記：原著 The Uses of Enchantment: The Meaning and Importance of Fairy Tales (1976) の翻訳〉
- Brake, E. (2019). 最小の結婚：結婚をめぐる法と道徳 久保田裕之監訳 白澤社 〈注記：原著 (Oxford University Press, c2012) の翻訳〉
- Eriksen, Thomas Hylland (2006). エスニシティとナショナリズム — 人類学的視点から 鈴木清史訳 明石書店 〈注記：原著第2版 (Pluto, 2002) の翻訳〉
- 加藤佳代 (2019). 当事者と共におこなう図書館の多文化サービス 基礎教育保障学研究, 第三号, 44-54
- 小林ソーデルマン淳子・吉田右子・和気尚美 (2012). 読書を支えるスウェーデンの公共図書館：文化・情報へのアクセスを保障する空間 新評論
- 国立青少年教育振興機構 (2013). 子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究 URL: https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/72/ (2021年7月5日)
- 久保木亮子 (2017). 保育の質の向上における「民話絵本の読み聞かせ」について 福祉臨床学科紀要, 第14号, 11-20

篠原京子 (2017). 伝承物語の読み聞かせの意義 常葉大学保育学部紀要, 第四号, 99-109

松山寛 (2020). 外国にルーツを持つ子ども達への絵本を通した支援の研究: 2言語での絵本読み聞かせに対する2歳児の反応を通して 保育文化研究第, 10号, 113-122

宮島喬 (2003). 共に生きられる日本へ: 外国人施策とその課題 有斐閣

文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領 (2017年告示) 解説「国語編」URL: https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afielddile/2019/03/18/1387017_002.pdf (2021年7月29日)

文部科学省 (2020). 外国人の子供の就学状況等調査結果 (確定値) 概要 URL: https://www.mext.go.jp/content/20200326-mxt_kyousei01-000006114_01.pdf (2021年8月6日)

盛山和夫・土場学・野宮大志郎・織田輝哉編 (2005). 〈社会〉への知/現代社会学の理論と方法 (下) 経験知の現在 勁草書房

米田雅朗 (2018). 新宿区立大久保図書館の多文化サービスの取り組みについて 専門図書館 [特集 図書館における外国人に対するサービス], No.287, 9-14

註

- (1) 移民・移住者とは社会学事典 (882頁～883頁, 見田宗介・栗原彬・田中義久編, 1994年, 弘文堂) によれば「国境を越えて生業の本拠地を移動させる人とその家族を指す」とされている。1990年代には途上国から先進国への移動が爆発的に増大。日本では1980年代後期のバブル期以降、日本もグローバル・マイグレーションの流れに組み込まれ、まずアジア系を主体とする留学生・就学生や労働者などが、次いで1990年代からは日系南米人労働者と研修・技能実習生などが大都市や地方工業都市を中心に急増した。1990年代中期頃から、これらの人びとの間に滞在の長期化がすすみ、2000年代以降、永住資格や日本国籍を取得する者も増加した。よって、日本社会は実質的な「移民化」が進行していると言える。本稿で示す移民移住者とはこうした流れの中で渡日してきた人びとのことをさすものとして使用している。
- (2) 在留外国人総数については出入国管理庁プレスリリース「2020年末現在における在留外国人数」URL: http://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00014.html (検索日: 2021年8月6日) を参照。
- (3) 日本図書館協会URL: <http://www.jla.or.jp/committees/tabunka/tabid/901/Default.aspx> (検索日: 2021年8月10日) より。
- (4) その他、豊中市岡町図書館や枚方市立中央図書館「国際おはなしの会」、横浜市中央図書館などでは外国籍住民向けの母語により読み聞かせを活かした取り組みが行われていた事例がある。また、「多言語絵本の会レインボー」のような草の根レベルにおいても活発に行われていた事例もある。
- (5) 外国にルーツを持つ子どもたちの言語能力の向上をめざした母語による絵本の読み聞かせについての研究については松山 (2020) の研究などがあるが、そのような子どもたちの子育てにおける「昔話や民話等物語の利用」についての研究はほぼ見られない。しかしながらこれら物語の子育てへの活用は個別の文化を伝えるこ

とを可能にする教育的価値があると言われていたことから、ここでは直接子育てにかかわった経験のある移民移住女性へのインタビューを行い、子育て期に実際にこうした物語が母文化の継承などを目的に使用されることがあるのかについて明らかにすることを試みた。

- (6) ホセ・リサルについては、羽田正監修『角川まんが学習シリーズ「世界の歴史13 帝国主義と抵抗する人々 1890年～1910年」』(2021年, KADOKAWA)を参照した。
- (7) 「おひさま、お月さま」URL: <https://www.youtube.com/watch?v=qQRfyRiQirM> (検索日: 2021年8月16日) の物語全内容を日本語へ翻訳した。ここでは全訳を掲載するのは紙面上の余裕がないため、内容については途中、中略している部分がある。韓国語から日本語への翻訳には翻訳協力K氏(事情により名は伏せる)に依頼した。
- (8) 預言者ヨセフ(ユースフ)の人物像についてはこのたびの研究にご協力いただいたサンディさんとのインタビュー内容から筆者がまとめた。
- (9) 一例をあげると、映画「ロード・オブ・ザ・リング」の元となった『指輪物語』は、昔から伝わる神話内容をエンターテインメント性のあるものに変容させている。